The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	2014年海外調査活動記録
Author(s)	大坪, 慶之; 片山, 剛; 山本, 一
Citation	近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター. 2015, 6, p. 125-133
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60281
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

2014 年海外調査活動記録

大坪慶之・片山剛・山本一

はじめに

2014 年は科研最終年度ということで、南京関係の研究プロジェクトについては実地調査よりも、国史館での史料を収集・精査することに重きが置かれた。広東関係の研究については、これまでと同じく、農村での聞き取り調査および档案館での史料収集を中心に行うこととなった。そのため、2014 年 3 月を含め、広東・台湾でそれぞれ 2 回ずつ海外調査を行った[1]。

１．第 1 回広東調査（2014 年 3 月 9 日～19 日）

3 月 9 日（日）【関空発⇒広州着】中国南方航空 CZ394 便

片山剛（大阪大学教授）、山本一（大阪大学特任研究員）が広州に到着。宿舎は建国酒店。到着後、陳忠烈氏（広東社会科学院研究員）と今後の調査について、会食しながら打ち合わせを行う。

3 月 10 日（月）【広州発⇒金利鎮着】　金利鎮金二村民委員会

早朝に陳氏と合流し、高要市金利鎮へタクシーで向かう。金利鎮に到着した後、金利鎮政府を訪れ、農弁処の責任者と面会し、今回の調査の詳細を伝える。

午後、宿泊する金盛大酒店に荷物を預けた後、金二村民委員会にて古老への聴き取りを行う。以前採訪を行い、興味深い口碑資料をいただいた古老はみな健在で、今回も多くの知見を得ることができた[2]。

夕刻、前回の調査で入手した衛星写真を片手に、古老の口碑資料に出てきた、土地改革前における三甲の鴨埗とその付近に所在する塱埗について、現場で古老から説明を受ける。付近の塱埗は複数あり、また農地改造や水路の付け替え等が行われているので、おおよその位置はつかめたが、確定までには至らなかった。夕飯は金利鎮政府の幹部と会食する。

3 月 11 日（火）　金利鎮金二村民委員会

午前中は、昨日と同じく金二村の古老に採訪を行う。

午後も昨日と同様、古老の口碑資料に出てきた、土地改革前における三甲の鵝埗とその付近に所在する塱埗について、衛星写真を参考に、古老とともに実地踏査を行う。場所を確定することができたのは大きな収穫であった。その後、金二村民委員会に戻り、再び採訪を行う。

---

[1] 加えて、10 月 14 日（火）～16 日（木）に荒武達朗（徳島大学准教授）が、南京市にて実地調査を行っている。これについて詳しくは本ニューズレター所収、荒武達朗「1930 年代南京の都市不動産登記文書と現在の秦淮区磨盤街社区：われわれのフィールドについて」を参照。

[2] 今回の採訪内容については、本ニューズレターに掲載する予定であったが、次号に延期する。

3 月 12 日（水）　金利鎮金一村民委員会

午前中、金一村の古老 5 人を採訪する。土地改革前夜における金江村付近の各塱埗をどの村が管理していたかを中心に聞き取りを行った。

午後は古老と共に実地踏査を行う。民国期の地図と古老の話をもとに、衛星写真に写っている塱埗の比定を行う。かつて村の幹部であった古老の協力もあり、民国期の地図にあらわれる塱埗名（土名）の多くを実際に確認することができた。

3 月 13 日（木）　金利鎮金江村民委員会

午前は、金江村の古老 4 人に採訪を行う。民国期の地図に出てくる各塱埗をどの村が管理していたかについて聞き取りを行う。

午後は古老と共に、土地の比定を行う。これまで不明であった塱埗の位置を確定することができた。夕刻、金江村民委員会に戻り、午前の聞き取りの続きを行った。

3 月 14 日（金）　金利鎮金江村民委員会／蜆崗鎮　【金利鎮発⇒広州着】

午前は昨日と同じく、金江村民委員会にて古老への採訪を行う。

午後、蜆崗鎮へ行き、老幹部に聞き取りを行い、簡単な実地調査を行う。また国土所にて、かつての塱埗の位置を示した地図を写真におさめる。この地図はこれからの我々の調査にとって非常に有益になると考えられる。

夕刻、広州へ戻る。宿舎は華廈大酒店。陳忠烈氏と一旦別れる。

3 月 15 日（土）　広州市内

広州購書中心で書籍を収集する。

3 月 16 日（日）　広州市内

黄埔軍官学校の旧址を参観するなどして過ごす。

3 月 17 日（月）　広東省档案館（広州市天河区）

陳忠烈氏と再会し、午前、午後ともに広東省档案館にて資料収集を行う。片山は民国期の金利鎮における村と村の境界をめぐる争いに関する档案を、山本は 1950 年代初の査田定産工作に関する档案をそれぞれ閲覧した。

3 月 18 日（火）　広東省立中山図書館（広州市越秀区）／広東省档案館（広州市天河区）

午前、高要市蜆崗鎮の地方志を探しに中山図書館へ行くも所蔵されていなかった。そのため広東省档案館へ移動、前日の作業の続きを行う。

午後も広東省档案館にて引き続き作業を行う。

夕刻、陳忠烈氏と会食する。

3 月 19 日（水）【広州発⇒関空着】中国南方航空 CZ389 便
　片山・山本が帰国。

２．第 2 回広東調査（2014 年 8 月 3 日～10 日）

8 月 3 日（日）【関空発⇒広州着】中国南方航空 CZ390 便
　片山剛（大阪大学教授）、山本一（大阪大学特任研究員）が広州に到着。宿舎は広州地中海国際酒店。今回の調査の主な目的は、これまで現地調査を行ってきた金利鎮に関する文献資料を広東省档案館で収集することである。

8 月 4 日（月）　広東省档案館（広州市天河区）
　本日から広東省档案館での調査を開始する。午前、陳忠烈氏（広東省社会科学院研究員）と面会し、今回の調査について打ち合わせを行い、広東省档案館を訪問する。午前中、片山は以前閲覧した民国期の金利鎮における境界争論に関する档案を閲覧する。また陳忠烈氏から肇慶付近の景福囲に関する史料が中山図書館に所蔵されているとの情報を得る。山本は以前閲覧した査田定産工作関係の档案を閲覧しようと申請するも、档案館側に拒否される。よって 1950 年代の広東省の政府公報を閲覧し、関連資料を収集する。
　午後、陳忠烈氏と別れ、片山・山本の両名で作業を継続する。

8 月 5 日（火）　広東省档案館
　片山・山本ともに、広東省档案館で前日の作業を継続する。

8 月 6 日（水）　広東省档案館、中山図書館（広州市粤秀区）
　午前、片山は広東省档案館にて前日の作業を継続する。山本は中山図書館に行き、金利鎮関係の史料を閲覧する。
　午後、山本が片山に合流し、広東省档案館で史料を閲覧する。

8 月 7 日（木）　広東省档案館、中山図書館
　午前中、片山は広東省档案館で作業を継続、山本は中山図書館へ行き、広東省の政府公報を閲覧する。また中山図書館で CNKI にアクセスし、関連する文献を収集する。午後、山本が片山に合流し、広東省档案館で史料を閲覧する。

8 月 8 日（金）　広東省档案館
　両名とも終日広東省档案館で作業を継続する。夕刻、陳忠烈教授と会食し、今回の調査の成果を報告する。

8 月 9 日（土）
　文書館・図書館が閉館しているため、広州市内の南越王宮博物館・城隍廟等を参観する。

8 月 10 日（日）　【広州発⇒関空着】中国南方航空 CZ389 便
　片山・山本が帰国。

３．第 1 回台湾調査（2014 年 8 月 25 日～9 月 7 日）

8 月 25 日（月）【関空発⇒台北着】日本航空 JL813 便など
　片山剛（大阪大学教授）・田口宏二朗（大阪大学准教授）・山本一（大阪大学特任研究員）・藤澤聖哉（大阪大学大学院生）の四名が関西国際空港から、大坪慶之（三重大学准教授）が中部国際空港から台北に到着。別科研で台北に到着した小林茂（大阪大学名誉教授）も合流する。宿舎は、福華国際文教会館。到着後、夕食までの時間を利用して、小林・大坪・山本・藤澤は書店へ行き、本科研プロジェクトに関する研究書を収集する。夕刻、小林は東華大学の郭俊麟氏と会い、調査への協力を依頼する。

8 月 26 日（火）　国史館（新北市新店区）
　総勢六人で国史館へ行き、作業を開始する。今回の調査では、1930 年代に南京市で実施された土地登記に関する個別の一件文書を主に閲覧する予定であるため、まずは用意していたエクセル入力用フォーマットを使い、それにデータを打ち込む。しかし、データ入力を進める中でフォーマットを改訂する必要性を感じ、原文書を見ながら新フォーマットを作成することになる。午後から、六名で新フォーマットへのデータ入力を開始する。

8 月 27 日（水）　国史館／中央研究院（台北市南港区）
　片山・田口・大坪・山本・藤澤の五名は、国史館でのデータ入力作業を継続する。小林は、中央研究院人文社会科学研究中心の廖泫銘氏を訪問し、日本統治時代の桃園台地における水利関係の地図および 1940 年代に撮影された南京市の空中写真を閲覧する。廖氏との話の中で、2008 年 9 月に南京市房産档案館で閲覧した 1930 年代の南京市区を対象とする地籍図が、台湾の内政部地政司にも存在し[3]、そのデジタル画像が中央研究院のデータベースで公開されていることが判明する。

8 月 28 日（木）　国史館／桃園県
　この日は二班に分かれて活動する。片山・田口・大坪・藤澤は国史館へ行き、データの入力作業を継続する。小林・山本は、桃園の農田水利会を訪ね、日本統治時代の桃園台地における水利・灌漑関係の地図を閲覧する。夜、上海交通大学の張志雲氏、アメリカのノースイースタン大学の P. Thai 氏、ケンブリッジ大学の Barak Kushner 氏らと会食する。

[3] 1930 年代の南京市区を対象とする地籍図については、大坪慶之「南京市房産档案館収蔵の民国期地政資料について―『南京市旧地籍図』を中心として―」『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』4，2009 年，pp.136-148 参照。

8 月 29 日（金）　国史館

片山・田口・大坪・山本・藤澤の五名で国史館へ行く。片山・大坪は、旗地関係の土地登記一件文書を閲覧するも、その複雑さに解読は難航する。田口は、昨日までの作業を継続する。山本・藤澤は、昨日までに閲覧済みである資料のデジカメ撮影を開始する。小林は別行動を取り、台湾師範大学で気象学を研究している洪致文氏と会い、戦前の中国大陸における気象観測データに関する史料についてレクチャーを受ける。

8 月 30 日（土）　自習＆ミーティング

この日は国史館が休みということもあり、各自で自由に図書館などへ行って関連資料を閲覧し、一週目の調査についてまとめる。その上で現段階での見通しを、午後 4 時 30 分からのミーティングで発表し討論した。そこでは小林の得た、台湾の内政部に地政関係の資料が所蔵されているという情報との関連で、主に民国期の南京市における地籍冊の有用性如何、登記簿は存在するか否か、国史館でデータ入力を進めている土地登記文書の内容等について様々な角度から議論した。

夜、台湾史研究者の張士陽教授と会食する。

8 月 31 日（日）

文書館が休みのため、各自、書店で関連書籍を収集したり、淡水の史跡を見学するなどしたりして過ごす。

この日、稲田清一（甲南大学教授）・荒武達朗（徳島大学准教授）が台北に到着する。

9 月 1 日（月）　国史館／中央研究院人文社会科学研究中心

田口・大坪・藤澤および昨日合流した稲田・荒武の五名は、国史館へ行く。土曜日のミーティングを経て、索引図及び戸地図という両方の地籍図や複数の年代の空中写真が入手可能であり、かつ古民家が保存されているので 2012 年 12 月に現地見学をした中華門から入ってすぐの殷高巷付近（1930 年代の『南京市地籍図』では第 4 区第 11 幅西側）にしぼって登記関係の一件文書を収集する。片山・小林・山本は、中央研究院へ行き、廖泫銘氏から内政部地政司所蔵の地籍索引図に関する説明を受け、そのデジタルデータをいただく。午後、山本は国史館組に合流し、写真撮影に入る。しかし、撮影費が値上がりしたと説明され、撮影を一時中断する。

この日、研究協力をお願いしている田島俊雄（大阪産業大学教授）が台北に到着する。

9 月 2 日（火）　国史館／国立台湾図書館（新北市中和区）／国家政策基金会（台北市中正区）

午前中は、片山・田島・稲田・荒武・田口・大坪・山本・藤澤の八名で国史館に向かう。幸い撮影費については、昨年までと同じ値段でよくなったとのことだったので、山本・藤澤はデジカメ撮影を再開する。残りのメンバーは、昨日までのエクセルデータ入力を継続

する。小林は別行動を取り、国立台湾図書館で資料を収集する。

午後、片山・田島・田口・大坪は小林と合流した後、栗原純教授（東京女子大学）・湊照彦准教授（大阪産業大学）とともに国家政策基金会を訪問し、江丙坤博士と面談する。江氏は東京大学で博士号を取得し、『台湾地租改正の研究』を出版するなど、本科研プロジェクトと密接に関わる研究をし、かつ戦後台湾における土地調査事業の実務経験をも持っている。江氏からは、流暢な日本語で、戦後の台湾における土地改革を中心に、貴重な話を聞かせていただく[4]。

夜、陳慈玉教授（中央研究院）を交えて、会食する。

9 月 3 日（水）　国史館／陽明大学（台北市北投区）

片山・田島は陽明大学での研究会に参加する。片山はそこで、国史館などで収集中の土地登記一件文書や南京市地籍図といった、民国期の地政資料に関する報告を行う。残る稲田・荒武・田口・大坪・山本・藤澤の六名は国史館へ行き、昨日までの作業を継続する。

この日、小林が帰国する。

9 月 4 日（木）　国史館

片山・稲田・荒武・田口・大坪・山本・藤澤の七名は、国史館で作業をする。これまで『南京市地籍図』第 4 区第 11 幅西側にしぼってきた対象区域を、東側にも拡大してエクセル入力を続ける。その結果、第 11 幅の全 180 段のうち、69 段の登記文書が国史館に所蔵されていることが判明した。一方、撮影の方は遅れ気味のため、地図関係にしぼって作業行う。田島は別行動を取り、二日間の予定で台湾南部の屏東方面へ調査に出る。

9 月 5 日（金）　国史館

片山・稲田・荒武・田口・大坪・山本・藤澤の七名は、国史館での作業を継続する。エクセルデータ入力の方は、『南京市地籍図』第 4 区第 11 幅の区域を完了する。写真撮影も、地図関係を中心に、ほぼ作業を終える。

9 月 6 日（土）　自習＆ミーティング

この日は国史館が休みということもあり、先週と同じく各自がこの一週間の成果をまとめるべく図書館などへ行き作業する。夕方、その結果を報告して、今回の調査を総括すると同時に、11 月開催予定のワークショップで、どのような報告をするかについて議論する。

この日、荒武が帰国する。

9 月 7 日（日）【台北発⇒関空着】日本航空 JL816 便など

片山・田島・稲田・田口・大坪・山本・藤澤の七名が、調査を終えて帰国する。

---

[4] そのインタビュー内容については、『中国研究月報』第 69 巻第 3 号、2015 年 3 月号、参照。

４．第 2 回台湾調査（2014 年 12 月 14 日～17 日、21 日～28 日）

12 月 14 日（日）【徳島発⇒羽田経由⇒台北着】日本航空 JL1438、JL099 便

荒武達朗（徳島大学准教授）が台北（松山空港）に到着。明日からの国史館調査に備える。

12 月 15 日（月）　国史館（新北市新店区）

荒武が国史館へ行き、『南京市地籍図』の第 12～15 幅に記載されている全 1195 段のうち、何件の、またどの地段の登記文書が国史館に所蔵されているかについて、リストアップ作業を開始する。

12 月 16 日（火）　国史館

荒武が前日の作業を国史館にて継続し、当該範囲における国史館所蔵の登記文書の件数について、その概数が判明する。

12 月 17 日（水）【台北発⇒羽田経由⇒徳島着】日本航空 JL096、JL1439 便

荒武が帰国。

12 月 21 日（日）【セントレア発⇒台北着】日本航空 JL821 便

大坪慶之（三重大学准教授）が中部国際空港から台北に到着。別科研で台北に到着した片山剛（大阪大学教授）・山本一（大阪大学特任研究員）が共同調査のために合流する。宿舎は、福華国際文教会館。

12 月 22 日（月）　国史館

三名で国史館へ行き、作業を開始する。今回の調査の目的は、夏の成果をふまえ、1930 年代の南京市において実施された土地登記に関する一件文書のうち、第四区第 12～15 幅のデータを初歩的に収集することである。まずは先発隊として荒武達朗（徳島大学准教授）が始めていた、国史館所蔵の一件文書が、当時のどの地番にあたるのかを再確認し、業主名等の基本情報や一見しての特徴などを入力し始める。

昼食時に国史館の職員の方から、冬に風邪の防止などから温めた蜜柑を食べる習慣があることを伺う。そこで、その時にいただいた蜜柑で試してみることにする。その味は、説明の通り苦かった。

12 月 23 日（火）　国史館／【関空発⇒台北着】キャセイ・パシフィック航空 CX565 便

三名で昨日の作業を継続し、12～13 幅にあたる文書の所蔵とその地番の確認をほぼ完了する。たまたま申請した档案のセット中に、「蒋中正」と名付けられた第五区のものが含まれていた。それを開いてみると、国民党政治学校の校舎建設のための土地収用に関わる、興味深いものであった。

この日、稲田清一（甲南大学教授）が台北に到着する。

12 月 24 日（水）　国史館

稲田を加えた総勢四名で国史館へ行き、昨日の作業を継続する。この日は、主に 14～15 幅を中心に作業を進める。閲覧できていない文書の残り件数から、12～15 幅全てを確認し終わるのに、あと二～三日かかりそうであるため、データを収集する内容を簡略化してスピードアップを図る。午後から、大坪・山本は比較的重要と思われる文書のデジカメ撮影に入る。

12 月 25 日（木）　国史館／中央研究院人文社会科学研究中心（台北市南港区）

午前中は、全員で国史館での作業を継続する。午後は二班に分かれて活動する。稲田・大坪は午前中の作業を継続し、一件文書の所蔵および地番確認を行う。この日の作業で、12～15 幅のうち、残るは継続中の 2 箱と申請中の 2 箱となる。

片山・山本は中央研究院へ行き、GIS 計画のプロジェクトに携わる廖泫銘氏（同研究中心研究助技師）を訪問する。そこで本科研でこれまでに収集・分析した地図に関する成果を説明し、廖氏側のプロジェクトの進捗状況を伺うとともに、情報と資料の交換を行う。

12 月 26 日（金）　国史館

片山・稲田・大坪・山本の四名で国史館へ行く。片山・稲田は昨日までの作業を継続し、15 幅までの地番確認作業を完了させる。大坪・山本は、午後から日中戦争後の 1946-48 年頃に作製された青焼きの「分段地籍図」のうち、まだ撮影できていない残り半分のデジカメ撮影に入る。撮るべき地図の枚数は膨大で、申請した 14 束のうち 2 束しか終わらず、作業は難航する。

夜、11 月に大阪大学で開催した第五回国際ワークショップでご講演いただいた林文凱氏（中央研究院台湾史研究所助研究員）と会食する。

12 月 27 日（土）　国史館

この日は国史館が、休館する元旦の振替のために臨時開館することを知り、当初の計画を変更して四人で昨日までの作業を継続する。その結果、日中戦争後の「分段地籍図」について第四区 12～15 幅の撮影を終える。また、同地域の一件文書のうち、興味深い内容の資料のデータ収集およびデジカメ撮影も行う。

12 月 28 日（日）【台北発⇒関空着】キャセイ・パシフィック航空 CX564 便、日本航空 JL564 便

稲田・大坪が、調査を終えて帰国する。片山・山本も同日帰国する。

おわりに

前号の海外調査活動記録でも記したように、実地調査においては民国期を知る古老の数が減少しているため、採訪が難しくなっている。民国期が「文献の中でのみの世界」とな

る日もそう遠くはないと感じさせられた。

国史館における史料調査では、土地登記文書の多さと内容の豊富さ――換言すれば、繁雑さと格闘する日々であった。当該文書をこの人数、このペースで調査し続けるなら、第4区のみを調査するのにも数年はかかる試算である。幸い史料は逃げない（国史館の史料が今後機密指示になり閲覧禁止になることは考えづらい）ので、史料収集とその分析を根気強く進めていくしかないであろう。

なお、本ニューズレター脱稿後の2015年3月に第3回の広東調査を予定していることを附言しておく。

最後に、海外調査では国内外の多くの先生方にお世話になった。ここに厚く御礼申し上げたい。